

白秋アートギャラリー(8)

憧れのフランス

宮内 博子

今年のオリンピックは、パリで開催された。開会式は史上初めてスタジアムの外で行われ、セーヌ川沿いやバルコニーで選手を出迎える人々や、その美しい街並みが映し出され、魅了された。ファッション、芸術、食、洗練されたフランスという国の醸し出す雰囲気憧れる人は少なくないだろう。

北原白秋も、西洋、ことフランスに憧れを抱いた一人である。

南風モウパッサンがみな子のふくら脛吹くよき愁
吹く

そぞろあるき煙草くゆらすつかのまま哀しからずやわかきラムボオ

白秋の第一歌集『桐の花』銀笛哀慕調「春」に収められている歌である。モウパッサンもランボーもフランスの作家であるが、この固有名詞が歌のことばと響き合う間接的な役割を果たしている。この二つの歌の「モウパッサン

ン」と「ラムボオ」を（音数は気にせず）入れ替えてみるとどうだろう。それぞれの作品や人名の響きのイメージから、モウパッサンは「南風」「をみな」と、ランボーは「煙草」「哀し」と共鳴し合い、魅力的な歌になっていることがよくわかる。

ああ笛鳴る思ひいづるはパノラマの巴里パリの空の春の夜の月

この歌の詞書に、「浅草にて」とある。浅草の地で聞こえてきた笛の響きにより、見たことのない巴里の空に思いを馳せている。白秋が実際に見ている東京の小さい空と、想像のパノラマの巴里の空。イメージを飛躍させることで白秋は憧れの巴里を手中に収めたのかもしれない。

仏蘭西のみやび少女がさしかざす勿忘草わすれなぐさの空いろの花
同歌集「白き露台」の中の一詩で、隣家の人妻俊子を思
つて詠んでいる。見も知らぬフランスの少女に俊子を重ね
た、何ともロマンティックな歌である。

こうしてみると、(フランス)は白秋の憧れの象徴そのもので、西欧の文化を詠み込んだ作品の数々は、白秋の憧憬を形にしたものだといえるのではないだろうか。

寝不足になりながら、パリオリンピックを観ていた。美しいばかりではなく、悲惨な歴史や多くの課題を抱えているフランスという国が、これからも多くの人の憧れの地であることを祈りながら。